

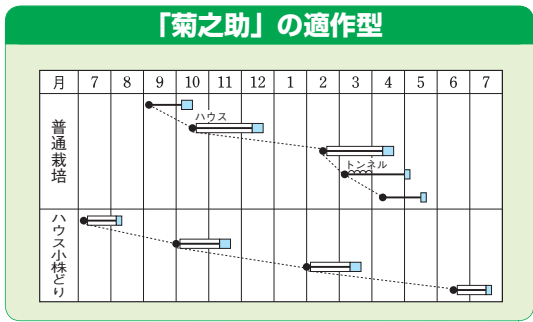
肉厚で食味のよい
丸葉系の大葉春菊!



新発表!
タキイ交配
シュンギク

菊之助

核家族化や労働時間の増加によって、調理の手間をかけず手軽においしく食べられる食材への嗜好が高まっています。サラダは簡単に数種類の野菜をとれることから、スーパーや直売所ではさまざまなミックスサラダなどの販売方法が提案されています。シュンギクといえば鍋物に欠かせない野菜として定番の品目ですが、実はカロテン・ビタミンB₂・カルシウム・鉄などを豊富に含んでいます。風味のよさと併せてアピールできれば、今後は従来の鍋需要だけでなく、新たな販売・消費形態の可能性を秘めています。このような観点から、タキイではシュンギクをより身近で使いやすい野菜として感じていただけるように、サラダ向けシュンギクの育成に取り組んできました。今回新発表する「菊之助」は、シュンギクのよい風味はそのままに、独特の苦みが少ない「ことや、肉厚でジューシーな食感」にこだわって育成した品種です。



タキイ研究農場
井手 一夫

「菊之助」の特長

1 鮮緑の丸葉系大葉春菊！

鮮緑で葉縁の切れ込みがごく少ない丸葉系の大葉春菊です。

※シユンギクは葉縁の切れ込みの程度によって、小葉種・中葉種・大葉種に分けられています。最も多く栽培されているタイプは中葉種ですが、大葉種も中国・九州地域を中心に栽培は盛んです。

2 苦みが少なくジューシーな食感

シユンギク特有の苦みがほとんどなく、葉は肉厚でジューシーな食感をもつためサラダ用として特にすぐれます。もちろんサラダだけでなく、鍋料理、あえ物、お浸しにもおすすめです。

3 栽培が容易

生育はややじっくりしていますが、ハウス中心の栽培を行うことで比較的容易に周年栽培が可能です。



↑葉ぞろい・株ぞろいにすぐれ、生育旺盛で栽培容易な「菊之助」。

4 収穫・調製作業が容易

葉はしなやかで折れにくいいため、収穫時の手間がかからず、結束・袋詰めも容易に行えます。

「菊之助」の栽培ポイント

1 圃場の準備と播種

圃場はできるだけ排水のよい場所を選びましょう。排水の悪い圃場では高畝にして排水を確保します。一方、ハウスでの栽培は土壌が乾燥しやすいため、整地の数日前に十分灌水し、土壌の深層に適度な水分を確保した上で整地を行うことが大切です。

シユンギクの発芽率は、コマツナ・ホウレンソウなどの軟弱野菜に比べてやや低い傾向にあります。そのため、播種後の灌水は十分に行い、斉一な発芽を促します。また、種子はやや好光性のため、播種後の覆土は薄めにし、軽く鎮圧します。

2 栽植密度

草丈20cm程度で収穫する場合は、条間20cm、株間5cm程度で播種します。2粒まきを基本とし、本葉が2〜3枚の時に間引きを行い、株間を整えます。また「菊之助」は中立性でそろいがよく、株の勝ち負けが出にくいいため、やや密植して草丈10〜12cm程度で収穫するベビリーフ栽培もおすすめです。

3 高温期対策

高温期の栽培では、芯葉から展開2〜3葉にかけ

て、葉縁が茶褐色ないし黒色に変色する芯腐れ症が問題になります。芯腐れ症は高温や乾燥、多肥条件で起こるため、特に初期の灌水はていねいに、ムラなく行うとともに、ハウスの換気に努めることもポイントです。

また、収穫1週間前は灌水を控えて、株の充実を図ることで、袋詰め後に株が腐敗する「ずるけ」の発生を防ぎます。芯腐れの発生が特に心配な場合には、この時期に遮光を行うことも効果的です。

4 病虫害対策

シユンギクは葉を食べる野菜ですし、登録農薬が少ない現状を考えると農薬に頼らない防除を心掛けたいものです。そのためには健全な状態での栽培が防除への第一歩となります。そこで十分な根張りを確保するための土づくりと排水対策、適切な肥培管理を心掛けます。また、病害株は速やかに抜き取って拡大を防ぎます。

害虫ではアブラムシ、ヨトウムシが問題となり、最近ではハモグリバエの被害が広がっています。いずれも初期防除が大切になります。

「菊之助」を有利に販売するために

直売所などで本品種をサラダ用として販売する際、いきなり売り場に言葉を並べるだけでは、消費者に用途の意図が伝わらず、手はなかなか伸びにくいものです。

そこで、サラダの写真や品種紹介のポップを利用した提案型の売り場づくりを心掛けます。時には試食してもらってもよいでしょう。また、レタスやミニトマト、ベビリーフといったほかの品目とサラダ向けに組み合わせ販売するなど、購入する側に立った販売方法を工夫しましょう。